

148
295

新時

015834-000-0

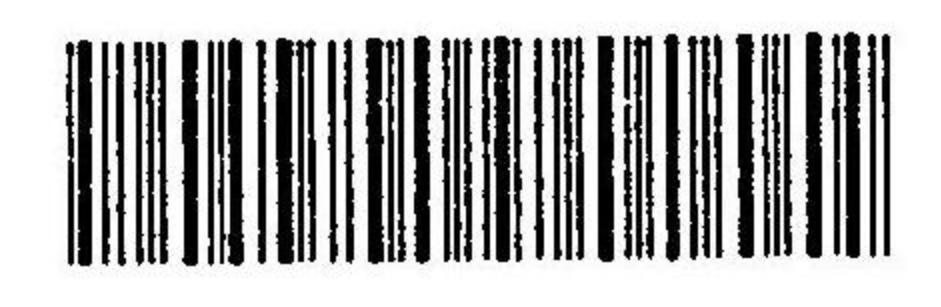
特16-366

寿

大内 青巒/著

M27.12

ABC-1589



寄海祝

はてしなき心の海やそ
 こひなき御代のめくみ
 のたくひなるらん

壽

「ことぶき」は「ことほぎ」にて祝ひ詞と云へりなり祝ひ詞も數多かれ

千代に八千代と云ひ常磐堅磐にと云ひ幾久しくと云ひ相變らずと云ふ

に命長く常に久しく世に在らんとの意ならぬは無し

又斯る辭は字に含みて數多き祝ひ詞を代表せしむべき文字はと云へは

唯その壽の字と命長しと云へる本義よりとこしなへとも久しともつねと

訓まする文字なれば古へより此字を譯して「ことぶき」とは爲したるな

らめされば見る世の中に最も命の長くして常に久しく鎮なへに存在すべし

と思はるる所の皆この祝ひ詞を助くるの種料となりて千代に八千代にと

云へは「さいれ石の巖となりて苔のむすまで」と謠ひついで久しくと云へ

は「岸の姫松幾世經ぬらん」と詠み山を見ては「さい浪のながらの山のなが

らへて久しがるべき君が御代かな」と言ひ海をながめては「君が代は遙か



萬々居士著

に見ゆるわたつみの限れる果もあらじと思ふ」と言ふ其他見るもの聞くものに事寄せて祝ひの詞かきあつむれど遂には彼の頼政が「君が代を何にたとへんと思へども果なき物のあらばこそあらめ」と詠しが如く無常遷流の世の中には眞實に果なき物のあるべきに非ざれば大方は言葉の文に根なし草の花を開かせ一時の心やりと爲すに過ぎずいかで正確なる祝の詞の實あるを得べき仍て熟を按ずるに凡そ世の中に眞實正確その命長くして常に久しく鎮なへに世を利し人を救はん者は其れ唯佛陀のみぞかし佛陀と云へば十方三世に其數もとより限りなしされど今の世の人は誰も其名を聞き知りたらん佛陀につきて彌陀釋迦二尊の壽命無量なることを擧げつらはん抑も大方の世の人は今を距ること二千數百年前中天竺の迦毘羅衛城に釋迦牟尼佛と稱する聖者あり十九の時に出家して山に入り三十にして成道し八十にして入滅したりきと聞きさては佛陀の命とても八十歳には過ぎざりけん彼の彌陀とても之に同じく久き昔に世を去りたる聖者なりきと云ふには過

ぎし何の壽命無量なることか有らんなど思ひ誤まれるも多からんいとく
 惑れましき事なりかし夫れ釋迦牟尼佛の壽命無量なることは妙法蓮華經の
 第十六品如來壽量品に詳悉なれば今其大要を左に抄譯せん

釋迦牟尼佛のたまはく一切世間の天人阿修羅皆おもひらく今の釋迦牟尼佛は釋氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場みちばたに坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりきと然れども我れ實に佛と成てより已來無量無邊百千萬億那由佗阿僧祇劫なり譬へば五百千萬億那由佗阿僧祇の三千大千世界を人ありて抹して微塵と爲し東方の五百千萬億那由佗阿僧祇の國を過ぎて乃ち一塵を下す是の如くして東に行き是の微塵を盡すが如き是の諸の世界を思惟校計して其數を知ることを得べきや否や是の諸の世界の若しは微塵を着けたるものと及び着けざる者とを盡く以て微塵と爲して一塵と一切とせん我れ佛と成てより已來復た此に過ぐるごと百千萬億那由他阿僧祇劫なり是よりこのかた我常に此娑婆世界に在りて説法教化し亦

九餘處の百千萬億那由他阿僧祇の國に於ても衆生を導利せり諸の衆生の
 小法を樂みて徳薄く垢重き者を見れば是の人の爲めに我れ少くして出家
 し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説けども然も我れ實に成佛已來久遠な
 ること斯の若し諸の衆生に種々の性種々の欲種々の行種々の憶想分別あ
 るを以ての故に諸の善根を生せしめんと欲して若干の因縁譬喩言辭を以
 て種々に法を説き所作の佛事未だ暫らくも廢せず是の如く我れ成佛して
 より已來甚大久遠壽命無量にして阿僧祇劫に常に住して滅せず(乃至)衆
 生を度せんが爲めに方便して涅槃を現すれども而も實には滅度せず常に
 此に住して法を説く我れ常に此に住すれども諸の神通力を以て顛倒の衆
 生をして近しと雖も而も見ざらしむるは衆我が滅度を見て廣く舍利を供
 養し威く皆戀慕を懷きて而して渴仰の心と生せしめんとてなり衆生既に
 信伏して質直に意柔軟となり一心に佛を見んと欲して自ら身命を惜まざ
 れば時に我れ及び衆僧俱に靈鷲山に出でん我れ諸の衆生を見るに苦海に

没在せり故に爲めに身を現せず其をして渴仰を生せしむ其心に戀慕する
 に因て乃ち出でて爲めに法を説く汝等智あらん者は此に於て疑ひを生ず
 ること勿れ

是れ實に法華經二十八品中の最も肝要とする所即ち釋迦出世の本懷と稱す
 る者この外は有らず更に要を取て約めて言は、佛は限り無き時間と共に佛
 と成りたれば時間に限り無きと俱に滅することも有らず然るに釋迦牟尼佛
 の天竺に現はれたまひて八十にして滅したまへる相を示し、が如きは衆生
 をして渴仰の心を起さしめんとの方々に過ぎざれば其實は常に此娑婆に住
 在して不斷に説法したまへり云へるなりされば同じく釋迦牟尼佛と稱し
 たてまつれる御名ながら其生滅を示したまへるをば之を應化身の釋迦牟尼
 佛と名け其壽命無量なるをば久遠實成の釋迦牟尼佛とは申すなり阿彌陀佛
 の如きも亦た然り佛說阿彌陀經に説きたまはく、
 是より西の方十萬億の佛土を過ぎて世界あり名けて極樂と曰ふ其土に佛

あり阿彌陀と號す、今現に在して説法したまへり彼の佛は何が故に阿彌陀と號するや彼の佛の光明無量にして十方の國を照すに障礙ある所なし是故に號して阿彌陀と爲す又彼の佛の壽命および其人民も無量無邊阿僧祇劫なり故に阿彌陀と名く阿彌陀佛の成佛已來今に十劫なり云々

故に是れ亦た久遠實成の阿彌陀佛とは稱するなりさて斯くまでに命長くして常に久しく鎮なへに世を利し人を救ひたまふ最勝無上の尊靈あることを知らずして、められもせぬ細石の巖となるまでと祝ひ摧けては薪ともなる松が枝になぞらへて、ことぶきを盡せりと思ふ淺ましきよいか巖と祝ふとも巖に等しき身とは成るべくも有らず、いかに千歳の松と謠ふとも松に等しき命だも保つべからず、然るに今擧る所の壽命無量なる佛陀の身は吾も人も皆等しく之を得べしと聞く嬉しきよ、誰か急ぎて其道を得んことを願はざるべき、いでや聊か吾人の佛と成て壽命無量の身を得べき道の略を説き明かさん、昔時東坡居士蘇子瞻とて學術文章比類なき儒者ればしけり、此人つとに佛

の道にも深く皈依して、悟道の印可さへ受たりけるが、先妣の孝養にとて其頃名高き畫師をたのみて精美と盡したる佛の尊像を畫かしめ、自から其上に偈文を書きて、佛徳を讚歎せられけり、其偈文は僅に五言十六句にて八十字のみなれど、八萬四千の法門など云へる廣大無邊なる佛法の大要を皆説き盡して遺憾なきに似たりされば、今その偈文を此に譯出して、更に其意を説き明すとせん

佛は大圓覺を以て河沙界に充滿し、我は顛倒想を以て生死中に沈没す、如何が一念を以て淨土に往生することを得ん、我れ無始の業を造る本と一念より生ず、已に一念より生ず亦た一念より滅す、生滅滅し盡る處則はら我れ佛と同じ、水と海中に投ずるが如く、風中に葉を鼓するが如し、大聖智ありと雖も復た分別すること能はず、

先づ初めに佛と云ふは天竺の語に佛陀耶と云ふを漢語に譯して覺者と曰ふ我が國にては「とれるひと」と云ふの意なり、覺と云ふに三つの差別あり、自か

ら覺ると他を覺らしむると覺の行の圓滿するとなり斯く三つの覺の備はれ
ると大圓覺とは名くるなり大とは限りなく廣きを曰ひ圓とは備はりて欠目
なきを曰ふ備はりて欠目なく又限りなく廣き覺なれば河沙界に充滿しつる
なり河沙界と云ふは天竺に名高き恒河と云へる大川に有りと有らゆる沙の
數の筭へ盡すべくもあらぬばかり數限りなき世界と云へる意にて天地日月
は更にも言はず草木にも石瓦にも海にも山にも禽獸にも佛の覺り充滿して在
さる所なしとなり今の世の學者の説に空間は無限なりなど云へる如く實
に世界の廣大無邊なることは前に擧げたる法華經の五百塵點劫の話にても
知らるべし凡そ佛教にて世界と云へることは世の謂ゆる大陽系とて一つの
大陽に附帶たる我が地球の如きもの幾つも集めたるを一須彌界と曰ひ其須
彌界を一千あつめたるを小千世界と名けさらに小千世界を一千あつめたる
を中千世界と曰ひまた中千世界を更に一千あつめたるを大千世界と爲す之
を三千大千世界と稱し一佛の化土とは定むるなり彼の彌陀佛の在しますと

云ふ極樂世界は我が娑婆世界の西の方十萬億の佛土を隔てると云ふも斯る
三千大千世界を十萬億ばかり隔てると云ふの意なりされば一の三千大千世
界と云ふも萬億の大陽系をあつめたるばかりなるに其を復た更に十萬億あ
つめたらんほどと云ふなれば其廣大無邊さ思ひやらるべし畢竟彼の空間の
無限なることを知らしめんとての佛説なれば彼の五百塵點劫と云へること
は更に其三千大千世界と五百千萬億那由他阿僧祇あつめ來りて其を細末に
して微塵と爲し東の方に向ひて更に五百千萬億那由他阿僧祇の三千大千世
界を往き過ぎて其微塵を一粒置き又五百千萬億那由他阿僧祇の三千大千世
界を過ぎて一粒を置き斯の如くして其微塵を置き盡したる後さらに其微塵
を一粒つゞ置きたる世界と又その間に通り過ぎたる限り知られぬ五百千萬
億那由他阿僧祇の世界とを皆一つに集めて復た之を微塵と爲し其微塵一粒
を一切經たる數取となして其微塵を盡したるよりも多き時間を経たりと云
ふが佛の命の今までに重ねたまへる劫數なりと云へるなり劫と云ふことは

天竺の語に劫波と云ふを略したるにて長き時間と云ふの意味なり如何ばかり長きぞと云ふに此に四十里四方の大なる函あらんに其中に芥子粒を満らしけりさて千年毎に其芥子一粒つゝを取除きて四十里四方に満ちたる芥子を皆取除き盡したる程の長き時間を一切とは名くるなり然るに今佛の命は其劫數を経たること彼の五百塵點の如くなりと云ふなれば唯に時間の限りなきのみならず復た空間の限りなきことをも示したまへるなり其を今東坡居士は河沙界に充滿すとのみ言ひたれど佛の光の十方世界に輝きて限りなきと共に佛の命の三世に涉りて限りなきをも顯はせるものと知るべし然るに吾等一切衆生は斯る佛陀のありとも知らず顛倒想を以て生死中に沈没せる悲しき顛倒とはサカサマなり想はオモヒにて心の作用なり吾等衆生は眼に色を見る耳に聲を聞き鼻に香を嗅ぐ舌に味ひ身に觸るゝ都て物事に對するるとき心に順へは之を食ばり心に逆けば瞋り罵する己に瞋れば眼も昏むべく已に食ばれば耳も聾ゆべしいかで心の作用の顛倒ならざるを得べきか

は之を名けて迷とも煩惱とも惑とも妄想とも名くるなり吾等衆生は限りなき時間と共に斯る顛倒妄想に陥りて限りなき世界の中に生れかはり死かはりたましく人間の身を得ても五尺の身のみ我と思ひて五十年が程の命をたのみとし苦むべからざるに苦み樂むべからざるを樂み無常の風にさそはれてはまたも五道に輪廻せん淺ましきよわはれ佛の教に依れば僅に一念の心にて五尺の身ながら大圓覺の佛の身と成り五十年の命ながらに無量壽の佛の齡を得べしと聞くいかにせば然る大果報を得らるべきぞとの意を如何が一念を以て淨土に往生することを得んとは言はれたるなり凡そ佛敎に土と云ふは唯に身の置き所をのみ言ふにはあらで世の謂ゆる立脚の地など言ひんが如く心の置き所作業の地位をも言ふことなるが吾人凡夫の作業の地位さて其心の置き所皆ことごとく煩惱妄想無明の塵垢ふかく積りて穢らはしき言はんかたなければ之を名けて穢土とは言ふなり然るに佛の御心は更にも言はず其御心作業の淨らかさ三身四智十力四無畏もろくの功德圓

満したまはざることなければ、其在します處をば浄土と名けたてまつるなり
 されど佛として浄土として初より其種類の異なる者あるには非ず、天然の釋迦
 もなければ、自然の彌陀も無し、皆修因感果の法則に従がへて、十界の依正現前
 するものなれば、吾人衆生々々世々生死の苦海に沈没し來れりと雖も、一念心
 にひるがへる所あれば、吾人の四支五官さながら三身四智なるべく、造次頓沛
 さながらに十力四無畏なるべきなり、其故いかんと原ぬるに「我れ無始の業を
 造る本と一念より生ず」と言ふて、生れかはり死かはり五道に輪廻し來りたる
 其原因は無始の業なり、無始とは限り知られぬ昔よりと云へることにて、業と
 は生々世々の間に於て身に行なひ口に言ひ心に思ひたる都てのウザなり、善
 業あれば善因となりて善果を結び、惡業あれば惡因となりて惡果を結ぶ、さて
 其業は如何にして起れると云ふに、無始の無明の迷ひの一念、彼の晴れわた
 りたる大空に、烟草くゆらすばかりなる浮雲のチラ／＼と起るが如くなりし
 より、見る間に増長蔓延し、八萬四千の迷ひの黒雲、眞如の月を覆ひ陰して、冥よ

り冥にさまよひ、惡業をかさね、惡果をうけ、生死の苦海に沈没し來れるものな
 れば、「本一念より生ず」とは言はれたるなり、さて又既に一念より生ず」と知りた
 らんに、「復た一念より滅す」と言へることも疑がふべきには非されど、果し
 て如何なる一念か能く此無始の業因を滅し盡すことを得べきや、天台宗の教
 には一念三千の觀行として、宇宙の現象ごとく、吾人平生の一念を離れずと
 説く眞言宗には一念不生の法門あり、阿毘羅吽劔の阿の一字を、一たび眼に見
 るのみにても、不生の悟りは開くるとかや、禪家に於ては無念の念、豁然大悟の
 一念に生死の山を一棒に打碎き、煩惱の海を一喝に渴盡せしむるの活機あり
 浄土門の諸宗に於ては、或は彌陀の本願を信する一念、或は御名を稱ふる一念
 一念發起入正定聚、此身このまゝ復たと再び凡夫に戻らぬ不退の位に入ると
 云ふ、顯密禪淨各宗各派、其説く所は機に應じ時に隨ひて異同ありとも、等しく
 一念ひるがへる碎啄同時に、無常の風は吹き止みて、都べての生死起滅の物事
 皆あどかたも無く消え失する、其有様を「生滅滅盡する處、即ち我れ佛と同じ」

と言へり我とい吾人一切衆生佛とは十方三世に涉りて壽命無量なる一切諸佛無始より以來諸佛に在ては大圓覺を以て河沙界に充滿したまひ我等は顛倒想を以て生死中に沈没し俚諺に謂ふ月と鼈釣鐘と挑燈は悉に違ひたる者とのみ思ひしに今一念の心の落著昨日にかはりて已に佛陀の光明に照されぬれば一天たちまち晴わたりて燿々たる一輪の明月我が眼にうつり來るが如く此時天上の明月と我が眼の光と別と言ふべからず亦同じとも言ふべからず月や我れ我や月かの別かぬまで心もそらに澄める夜の月なを詠むる外は有らざるなるべし今吾人の佛と同じき有様はそれにも勝りて水を海中に投ずるが如く風中に葉を鼓するが如しとなり我等衆生の五尺の身五十年の命に執着して差別の妄想に苦樂顛倒する様は器に汲みたる濁り水の如くなるを今大海の中に投入るれば濁れる水も清き水も皆その差別の相を見ず悉く一つ鹹味の潮と爲る如く又露と云ふは轉の火なを起す吹子のたぐひなりとかや限りも無き虚空の間に颯々と吹立る風の中にて更に微細の限りある

吹子の風ふく時吹子の風と天ふく風と同じとや言はん別とや言はんたとひ如何なる大聖智ありと雖も復た分別すること能はずと言ひて我等凡夫が此身此まゝ佛と同じく河沙界に充滿して三千世界を我家と爲し人生七古來稀なりなぞ啣ちたる露の命さながらに五百塵點劫を経たまへる佛の壽命と少しもかはらぬ壽命を得て未來永劫死することなく復た生ると云ふこともなき安穩快樂の身となることは唯不可思議と仰ぐの外なく決して知慮分別の及ぶべきには非すとなりさて此の如き道理を以て吾人直に佛と同じ身と成り得たらんにはもはや此世限りの我には非す五尺限りの身にも非す五十年限りの命にも非すさりながら此に至りて頭を回らし眼を轉じて顧りみれば壽命無量の佛の身ながら人間一期五十年の身と現して此世の衆生を救ふべき重き責任を擔ひたる我身なりすと云ふことを知らるべし我身ながらも尊とさ身なり我身なりとて輕くしく思ふべきかは君となり親となり臣となり子となり夫となり婦となり兄弟となり朋友となり農となり商となり武

臣となり文官となる、其職分にこそ差別あれ、其職分そのまゝに大慈悲心を本として衆生済度の責任を盡さば、君となりては君の職分そのまゝに佛の方便親となりては親の職分そのまゝに佛の本願夫婦の睦み朋友の信さながら般若波羅密の大光明なるを最と尊とき、かゝる相を山高く水長しとも云ひ、柳は緑り花は紅むとも云ふなり、千秋萬歳の「ことぶさ」何かは之に過ぐるもの有らんや、

天地のくまなき光いにしへの
身のくまなき光なりけり

定價金一錢

明治二十七年十二月十三日發行

○ 著 述 者 東京麻布區北日下窪町二番地 大内青巒
○ 版 權 東京々橋區加賀町十四番地 丹 靈 源
○ 所 有 東京々橋區和泉町印刷所 北澤久次郎
○ 發 行 所 東京々橋區加賀町十四番地 國 母 社

大内青巒居士著

戦争と佛教

一冊定價金四錢郵税三冊迄二錢
紙數七十頁にて總平かなつさ也

曾つて陸海の軍人に賜りし 勅諭の精神に基づき佛教の眞理を發揚して佛教の戦争に對する理想及び因縁事實を明かに暢述し其説甚だ簡潔にして其尤も平易なれば凡そ新聞雜誌と讀み得る程の人は誰にても之を解し得べければ或は之を汎く施本として國民軍の元氣を發揮せしめ或は之を以て演説若しくは説教の參考にして能く大乘佛教の國家に對する觀念行爲を詮説することを得べし

大内青巒居士著

佛教軍歌 道ある軍

百冊以上特別廉價一冊金五厘の割
郵税は十冊ごとに金二錢増し

右は慈悲方便と六波羅密との二題に於て戦争と佛教との關係を論ひ。名將勇士の一題に於て古今英雄の佛教を信して戦争に勝ちたる事蹟を唱へたる三首の今昔長歌なれば高尚にして勇壯また優美にして通俗なる軍歌なり乞ふ盡忠報國の志士敢て補を購究し汎く施本の宏舉を爲し以て士氣を鼓舞せられよ

發行所

東京々橋區加賀町十四番地

國

母

社

君が代は

あよにやあよに

たゞれしこの

いはほとなりて

こけの

むすまを